

史跡妙心寺境内・ 平安京右京一条四坊八町跡

2003年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

史跡妙心寺境内・
平安京右京一条四坊八町跡

2003年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生きています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来1200年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかってくる事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じて広く公開することで市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用をはかっていきたいと願っています。

研究所では、平成13年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平米から、数千平米におよぶ大規模調査までありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できることとなります。

このたび妙心寺涅槃堂再建工事に伴います史跡妙心寺境内・平安京跡の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げます。

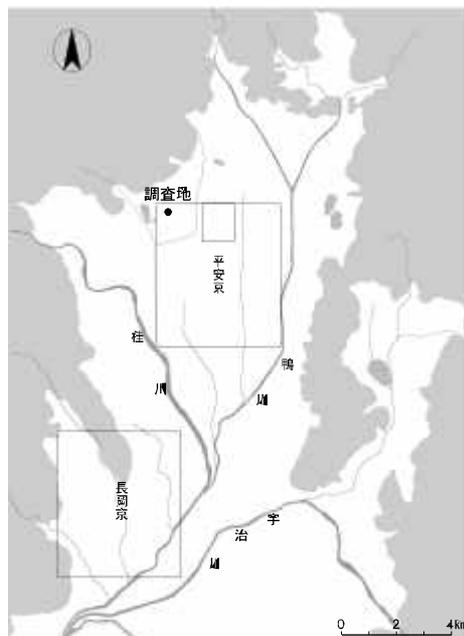
平成15年3月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 史跡妙心寺境内、平安京右京一条四坊八町跡
- 2 調査所在地 京都市右京区花園妙心寺町
- 3 委託者及び承諾者 宗教法人 妙心寺 代表役員 西片義保
- 4 調査期間 2002年11月18日～2003年1月31日
2003年3月26日～2003年3月28日（立会調査）
- 5 調査面積 約330m²
- 6 調査担当職員 調 査 山本雅和・鎌田泰知
測 量 宮原健吾
写真撮影 村井伸也・幸明綾子
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「花園」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 日本測地系（改正前） 平面直角座標系 （ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用基準点 京都市が設置した京都市遺跡測量基準点（一級基準点）を使用した。
- 11 遺構番号 通し番号を付し、遺構種別を前に付した。
- 12 遺物番号 挿図の土器類・木製品の順に通し番号を付した。
- 13 掲載写真 村井伸也・幸明綾子・調査担当職員（立会調査）
- 14 作成担当職員 山本雅和・鎌田泰知

（調査地点図）



目 次

1 . 調査経過	1
2 . 遺跡の位置と環境	2
3 . 遺 構	
(1) 層序と遺構の概要	3
(2) A 区の遺構	4
(3) B 区の遺構	4
(4) C 区の遺構	6
(5) D 区の遺構	10
(6) 霊屋移築工事に伴う立会調査	11
4 . 遺 物	
(1) 遺物の概要	11
(2) 土器類	11
(3) 瓦 類	14
(4) その他の出土遺物	17
5 . ま と め	18

図 版 目 次

図版 1	遺構	1	A 区全景 (北から)
		2	B 区全景 (北から)
		3	B 区土壙198石垣 (南東から)
図版 2	遺構	1	C 区全景 (東から)
		2	C 区溝60石垣 (北西から)
図版 3	遺構	1	C 区土壙103 (西から)
		2	C 区柱穴55・柱穴54 (西から)
		3	D 区全景 (西から)
図版 4	遺物		瓦・石製品

挿 図 目 次

図 1	調査位置図 (1 : 5,000)	1
図 2	調査前全景 (北東から)	2
図 3	調査状況	2
図 4	基本層位図 C区北壁 (1 : 40)	3
図 5	調査区配置図 (1 : 500)	4
図 6	A区平面図 (1 : 100)	5
図 7	B区平面図 (1 : 100)	5
図 8	B区土壙198石垣実測図 (1 : 40)	5
図 9	C区土壙103実測図 (1 : 20)	6
図 10	C区平面図 (1 : 100)	7
図 11	C区溝60石垣実測図 (1 : 40)	8
図 12	C区溝60断面図 (1 : 40)	9
図 13	D区平面図 (1 : 100)	10
図 14	D区溝170南壁断面図 (1 : 40)	11
図 15	壺屋移築地点基礎掘削状況 (西から)	11
図 16	土器類実測図 (1 : 4)	13
図 17	瓦類拓影・実測図 (1 : 4)	15
図 18	瓦刻印拓影 (1 : 4)	16
図 19	石製品実測図 (1 : 8)	17

表 目 次

表 1	遺構概要表	4
表 2	遺物概要表	12

史跡妙心寺境内・平安京右京一条四坊八町跡

1. 調査経過

調査地は、京都市右京区花園妙心寺町に所在する妙心寺山内に位置する（図1）。2002年、大本山妙心寺により山内の涅槃堂の再建工事が計画された。当地は史跡妙心寺境内・平安京跡にあたっていることから、京都市文化市民局文化部文化財保護課の指導により発掘調査を実施することとなり、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が調査を担当した。

調査地では、先に涅槃堂霊屋の解体工事が行われており、また、既存建物や現地事務所・車両進入路を考慮して調査区はA区からD区の4箇所に分けて設定した（図5）。調査面積は約330m²である。

発掘調査はC区より開始した。重機掘削を2002年11月20日から22日まで行ったのち、遺構調査を11月26日から開始した。C区の調査終了後、12月24日からA区・B区・D区の重機掘削を行い、遺構調査を12月25日より開始した。また、D区では宇多川の旧流路を確認するため、南東部を約1m拡張した。それぞれの調査区では検出した遺構面で精査を行い、遺物を採集し、最後に断割り調査により下層の堆積状況を確認した。2003年1月31日に発掘調査を終了した。排土は調査地内で処理し、各調査区を埋め戻した。

なお、調査中の2002年12月20日に妙心寺山内の関係者に調査地を公開した。

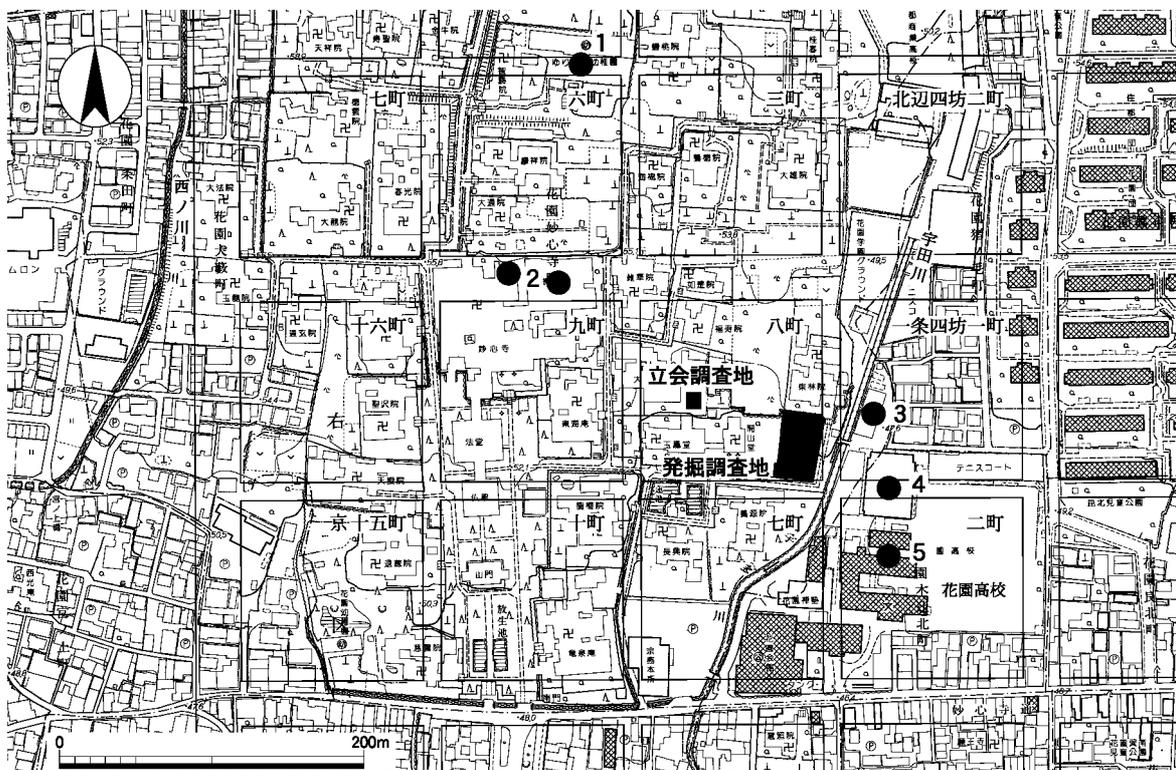


図1 調査位置図（1：5,000） 黒丸は既調査地

また、涅槃堂再建工事に伴う発掘調査と併行し、解体保存作業が進められていた霊屋が、大心院の本堂南東部に移築されることになった。それに伴い霊屋基壇基礎部分の立会調査を2003年3月26日から同3月28日にかけて実施した。調査対象面積は約90m²である。

2. 遺跡の位置と環境

位置と環境 調査地は妙心寺山内の南東部に位置する（図1）。妙心寺は京都盆地北側の山々から延びる南北方向の緩やかな尾根の上に立地しており、西側には西の川、東側には宇多川が流れている。方丈・法堂・山門などの主要な伽藍は尾根筋上に並び、それらを取り囲んで多数の塔頭が営まれている。調査地は、西側を玉鳳院、北側を東林院、南側を養源院に隣接し、東側には宇多川が流れる位置にある。宇多川を挟む東側には明治30年（1897）まで麟祥院があり、現在は花園高等学校となっている。

調査地周辺の歴史的状況は次のように概観することができる。

調査地は平安京の条坊復元では右京一条四坊八町南東部にあたる。右京一条四坊八町は平安京の北西部で、妙心寺の縁起には、この周辺に八町の面積を占める籍田があり、後に「花園離宮」と呼ばれた離宮や「池館」と呼ばれた源有仁の邸宅が営まれたことが記されている。

また、妙心寺は花園上皇がこの地にあった離宮を禅寺に改めたもので、開創年代には諸説あるが、14世紀前半に創建されたことは確実である。その後、応仁の乱による兵火などで大きな被害を受けることもあったが、皇室や有力大名らの信仰を集めて隆盛となり、現在では臨済宗妙心寺派大本山として広大な境内を占めるに至った。国宝の梵鐘や墨跡を所蔵し、法堂をはじめとする境内の多数の建物が重要文化財に指定されている。

周辺の調査 調査地周辺でこれまでに行われた主要な調査の概要を述べる。

右京北辺四坊五町南東部の発掘調査（図1-1）では平安時代後期の井戸、江戸時代後期の南北溝などが検出された¹⁾。六町南部の発掘調査（図1-2）では平安時代前期から中期の土御門大路側溝、平安時代後期の土塋・柱穴、室町時代の土塋・柱穴、江戸時代後期の溝・土塋・柱穴などが検出され、飛鳥時代の土器が出土した²⁾。六町南東部の立会調査では平安時代後期の溝などが



図2 調査前全景（北東から）



図3 調査状況

検出された。三町・四町東部の立会調査では平安時代中期の正親町小路側溝・柱穴、桃山時代の柱穴などが検出された。³⁾⁴⁾

右京一条四坊九町北西部の立会調査では平安時代後期の井戸などが検出された。また、東部の立会調査では平安時代後期の井戸、室町時代中期の井戸・土壇、桃山時代の溝・土壇などが検出された。⁵⁾ 十町南西部の立会調査では平安時代後期の井戸・土壇・柱穴、桃山時代の井戸・池などが検出された。また、東部の立会調査では平安時代後期の土壇、室町時代中期の土壇、桃山時代の土壇などが検出された。⁶⁾

調査地東側の花園高等学校内では数回の発掘調査が実施されている。一町南西部の発掘調査(図1-3)では宇多川の旧流路、時期不明の溝・土壇・柱穴などが検出された。⁷⁾ 一町・二町西部および鷹司小路の調査(図1-4)では鎌倉時代の溝・集石遺構・土壇・柱穴、江戸時代後期の土壇・溝などが検出された。⁸⁾ 二町の発掘調査(図1-5)では室町時代に埋没した宇多川の旧流路、平安時代後期から鎌倉時代前期の溝・土壇・柱穴、江戸時代の流路・土壇などが検出され、弥生時代後期の手焙形土器が出土した。⁹⁾

今回発掘調査を行った右京一条四坊八町では、南西部の立会調査により現在に残る蓮池が平安時代中期までさかのぼり、南側の七町にまで広がっていたことが明らかとなった。そのほか、調査地南側道路での立会調査で平安時代前期から中期の土壇、桃山時代の土壇、江戸時代の井戸などが検出された。¹⁰⁾

3. 遺 構

(1) 層序と遺構の概要(表1)

層序(図4) 調査地の層位は表土・盛土・地山に大きく分けることができる。表土は腐植土および調査前に建てられていた涅槃堂の解体に伴う排土で、調査区全体に約10~20cmの厚さで広がる。盛土は霊屋地下室の建設に伴う排土で、霊屋の東西両側に約30~60cmの厚さで積み上げられ

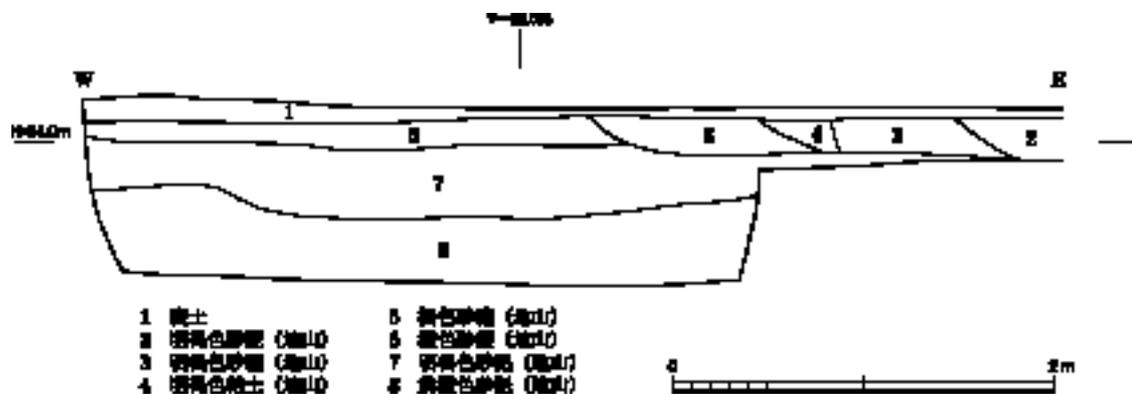


図4 基本層位図 C区北壁(1:40)

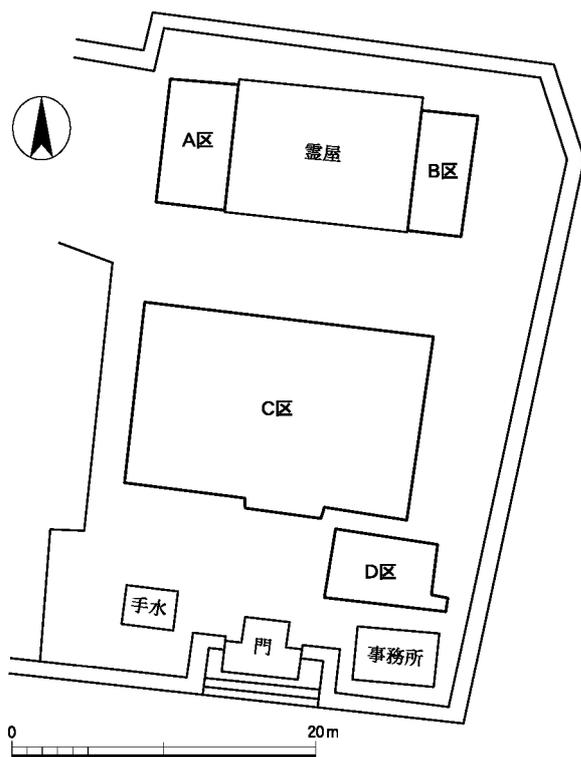


図5 調査区配置図(1:500)

る。調査前、霊屋の両側には南側から一段高い平坦面が見られたが、この段差は盛土によるものである。表土・盛土の下層はすぐに地山になる。地山は黄橙色・明褐色・褐色などの色調の粘土・砂泥・砂礫である。それぞれの層は南東方向に緩やかに傾斜しており、北西部や北東部には堅く締まった砂礫、南東部には粘土が分布する。

遺構の概要 調査区はA区からD区の4箇所に分けて設定した(図5)。遺構の大部分は地山面で検出した。地山面は北西から南東方向に緩やかに傾斜しており、A区・B区北部とD区南部との高低差は約80cmである。

検出した遺構の総数は199基になる。江戸時代中期から後期の遺構は、各調査区に広く分布している。江戸時代前期の遺構はA区・

B区にはなく、C区溝60やD区溝170など規模の大きい遺構が多い。室町時代以前の遺構は検出していない。また、遺物が出土しなかったため時期を特定できない遺構もある。

以下では調査区ごとに、遺跡を理解する上で重要と判断した遺構を報告する。なお、各検出遺構および出土遺物の時期の判定は平安京・京都¹¹⁾ 期～戢期の編年案を準用する。

(2) A区の遺構(図版1、図6)

東部は霊屋地下室の掘形により攪乱を受けている。検出した遺構はいずれも陶磁器や瓦類を廃棄した土壌である。すべて江戸時代中期以降の遺物が出土した。

(3) B区の遺構(図版1、図7)

西部は霊屋地下室の掘形により攪乱を受けている。検出した遺構は陶磁器や瓦類を廃棄した土壌が多く、複数が切り合っていた。すべて江戸時代中期以降の遺物が出土した。

表1 遺構概要表

時 期	遺 構			
	A 区	B 区	C 区	D 区
江戸時代前期			溝15・溝60・溝110・ 溝115・溝141、 柱穴	溝170
江戸時代中期 ～後期	土壌	土壌198、 土壌	柱穴54・柱穴55・土壌43 ・土壌96・土壌103、 土壌・柱穴	土壌

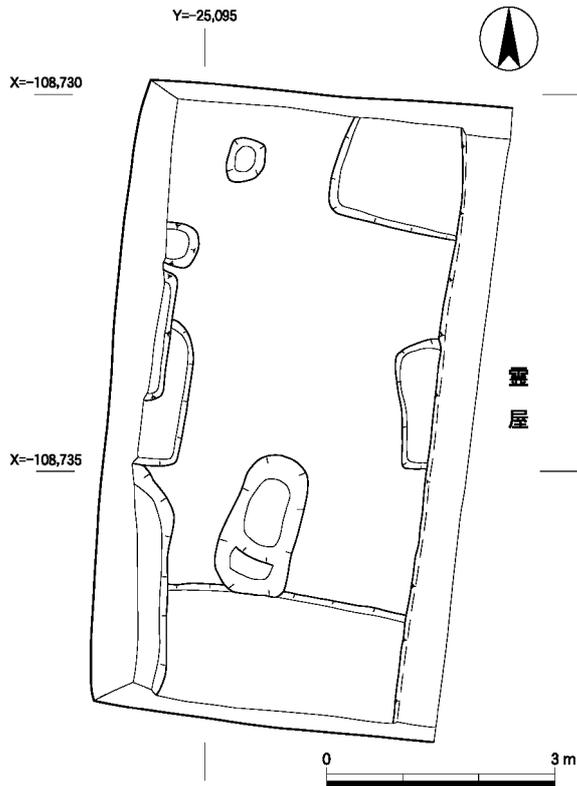


図6 A区平面図(1:100)

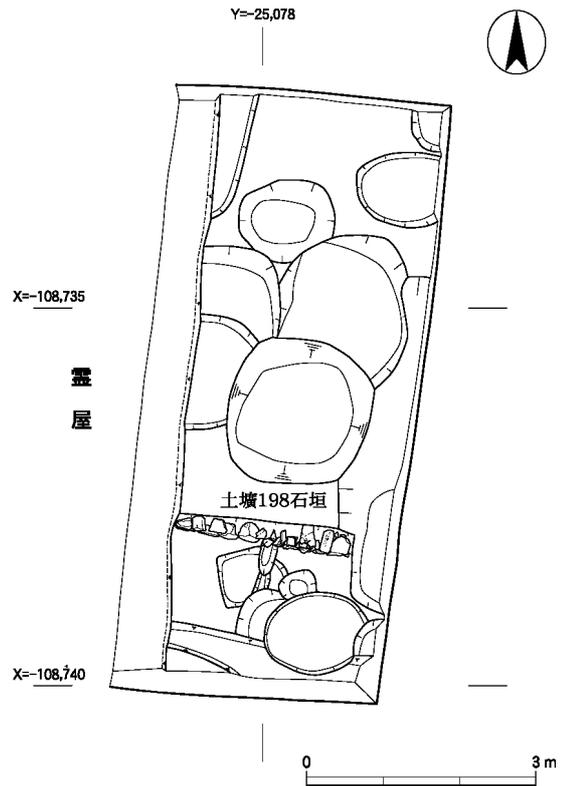


図7 B区平面図(1:100)

土壙198石垣(図版1、図8) 南部で検出した南面する石垣である。北から約80°西へ振る方位をとる。検出した長さは約2.3mで、東側・西側へさらに延びていた可能性がある。残存高は約0.2~0.3mであるが、上部が乱れていることから削平を受けたと考えられる。大きさ約10~30cmの石を2段以上積み上げる。石材は砂岩・チャートを用い、軒丸瓦や平瓦を転用して石材とともに積み上げる箇所もある。掘形は幅約1.1m、深さ0.4m以上で、裏込めには大きさ数cm~約10cmの河原石や瓦類を含んだ砂泥を積む。周期の遺物が出土した。

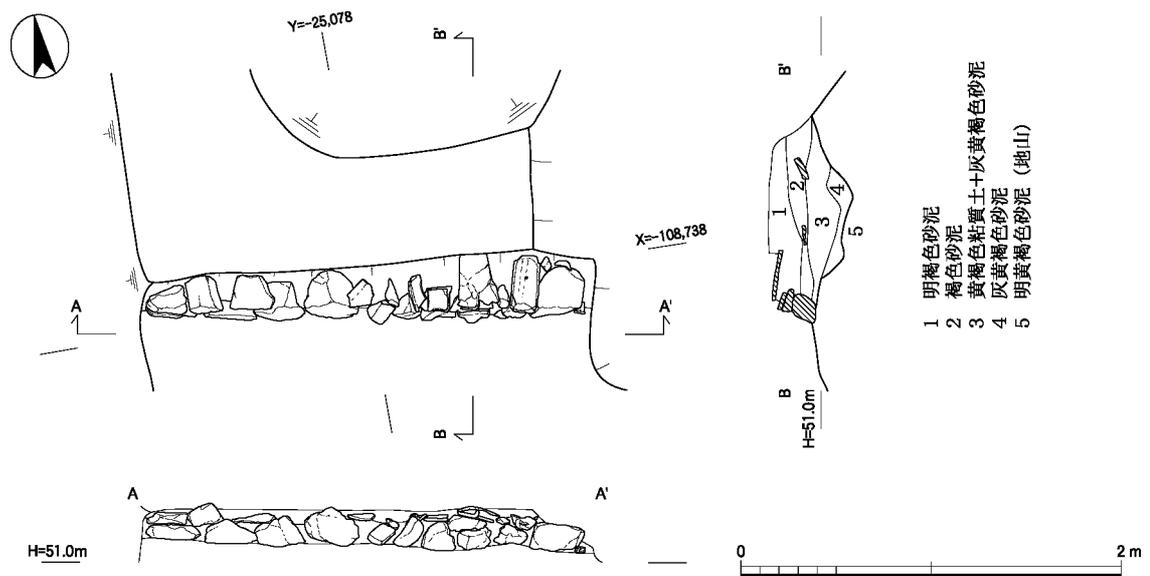


図8 B区土壙198石垣実測図(1:40)

(4) C区の遺構(図版2、図10)

最も大きな調査区で、検出した遺構も多い。南部の東西方向の溝や等間隔で並ぶ方形の土壇は、調査前に建てられていた涅槃堂に伴う攪乱である。

土壇103(図版3、図9) 北西部で検出した。東西2.4m以上、南北約0.9mの長円形で、深さは0.2m以上である。大きさは数cm~30cmの河原石を敷き並べる。中央部に大きい石材が集まる傾向にあるが、規則性は看取できない。墓壇の可能性を考えて、精査を行ったが明確な痕跡を認めなかった。用途不明の遺構である。 Ⅱ期~Ⅲ期の遺物が出土した。

土壇96 北部で検出した。南北約3.1m、東西約1.6mの隅丸方形で、深さは約0.6mである。埋土は褐色砂泥で、大量の瓦・瓦片とともに Ⅱ期の遺物が出土した。

土壇43 北東部で検出した。直径約0.8mのほぼ円形で、深さは約0.5mである。埋土は黄褐色砂泥で、 Ⅱ期の遺物が出土した。

柱穴54・柱穴55(図版3) 北東部で検出した。検出した柱穴は東西方向に並ぶ2基で、間隔は約1.8mである。北から約80°西へ振る方位をとる。柱穴は直径約0.7~0.8m、深さ約0.5mで、底部に大きさ約30cmの大型の石を平坦な面を上に向けて据える。柱穴はさらに北側へ延びていた可能性があることから建物の一部と考えられる。埋土はともに黄褐色粘質土で、柱穴54から江戸時代の瓦片が出土した。

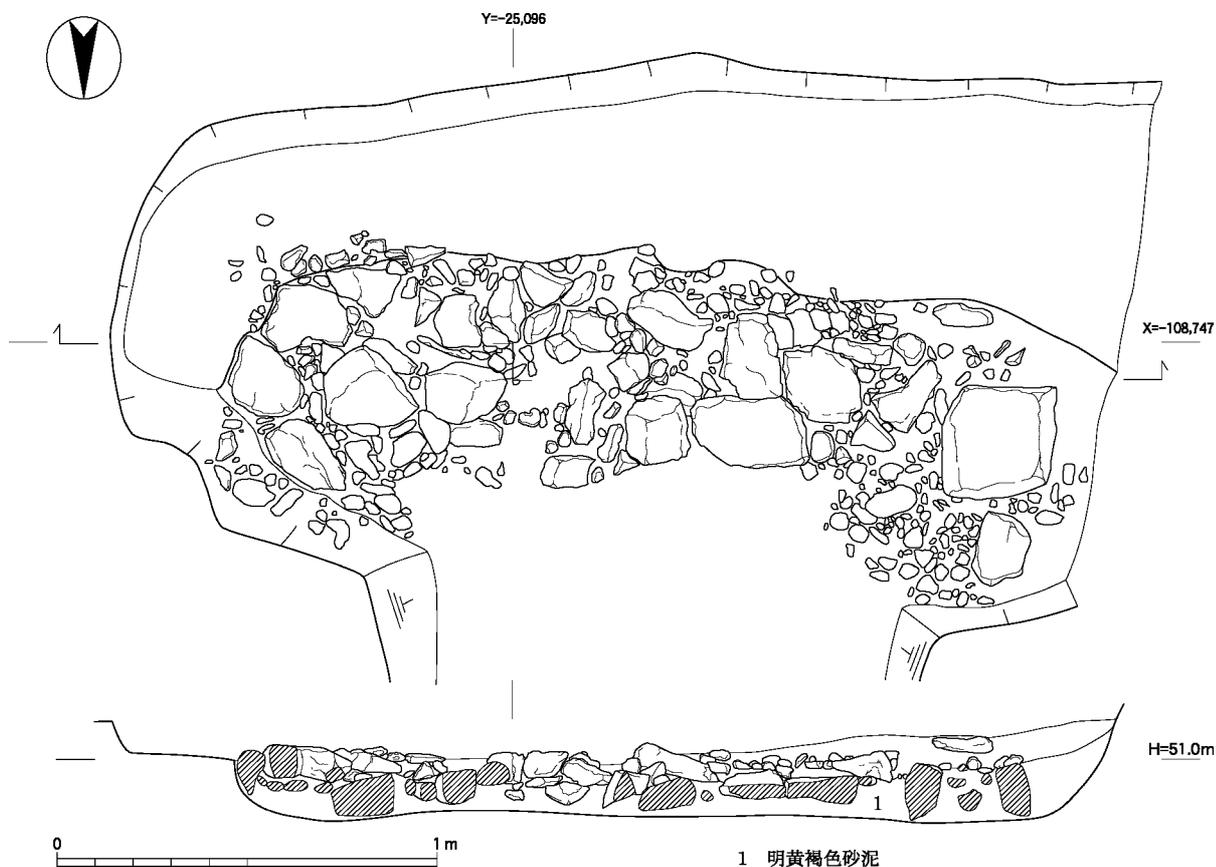


図9 C区土壇103実測図(1:20)

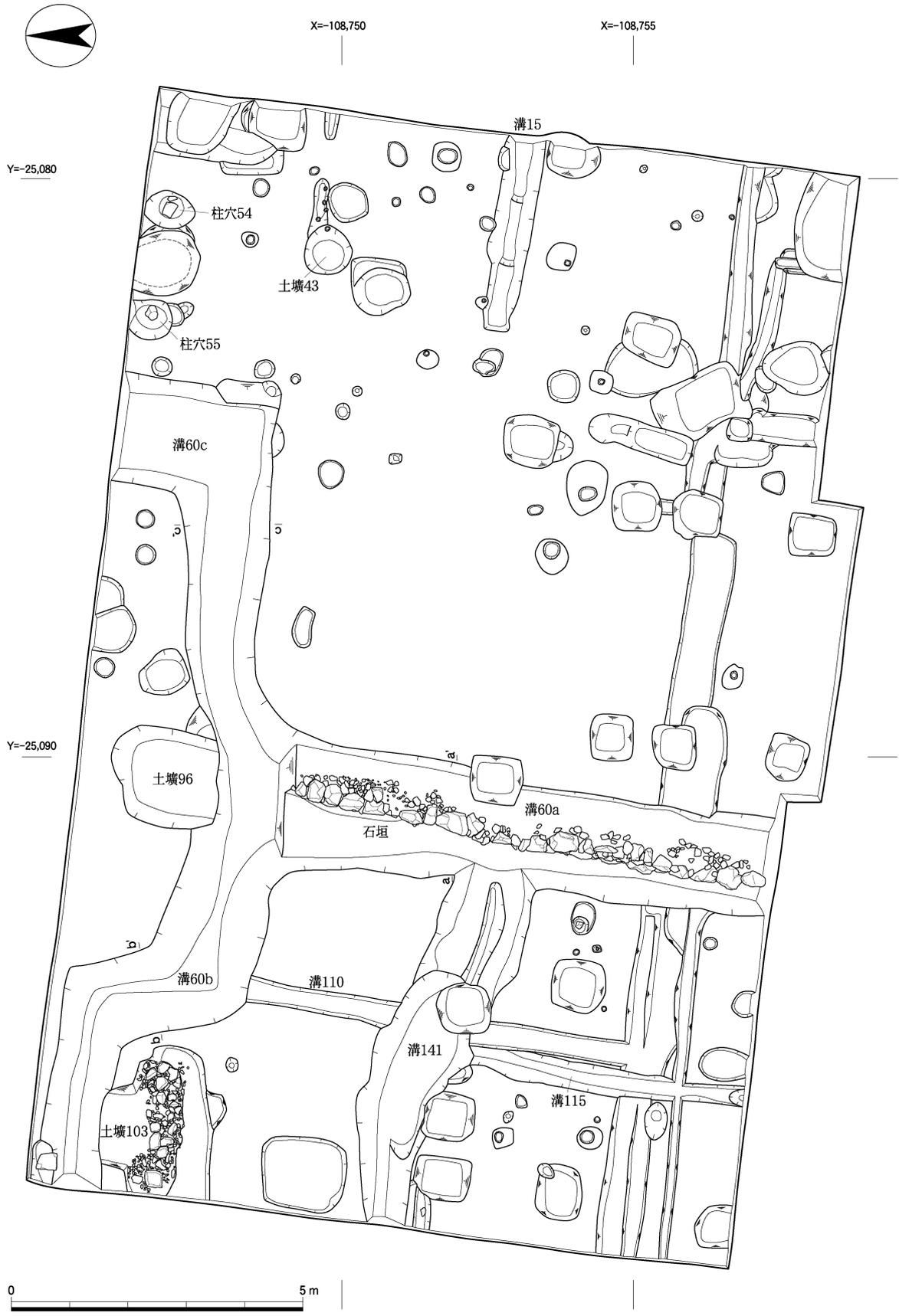


图10 C区平面图(1:100)

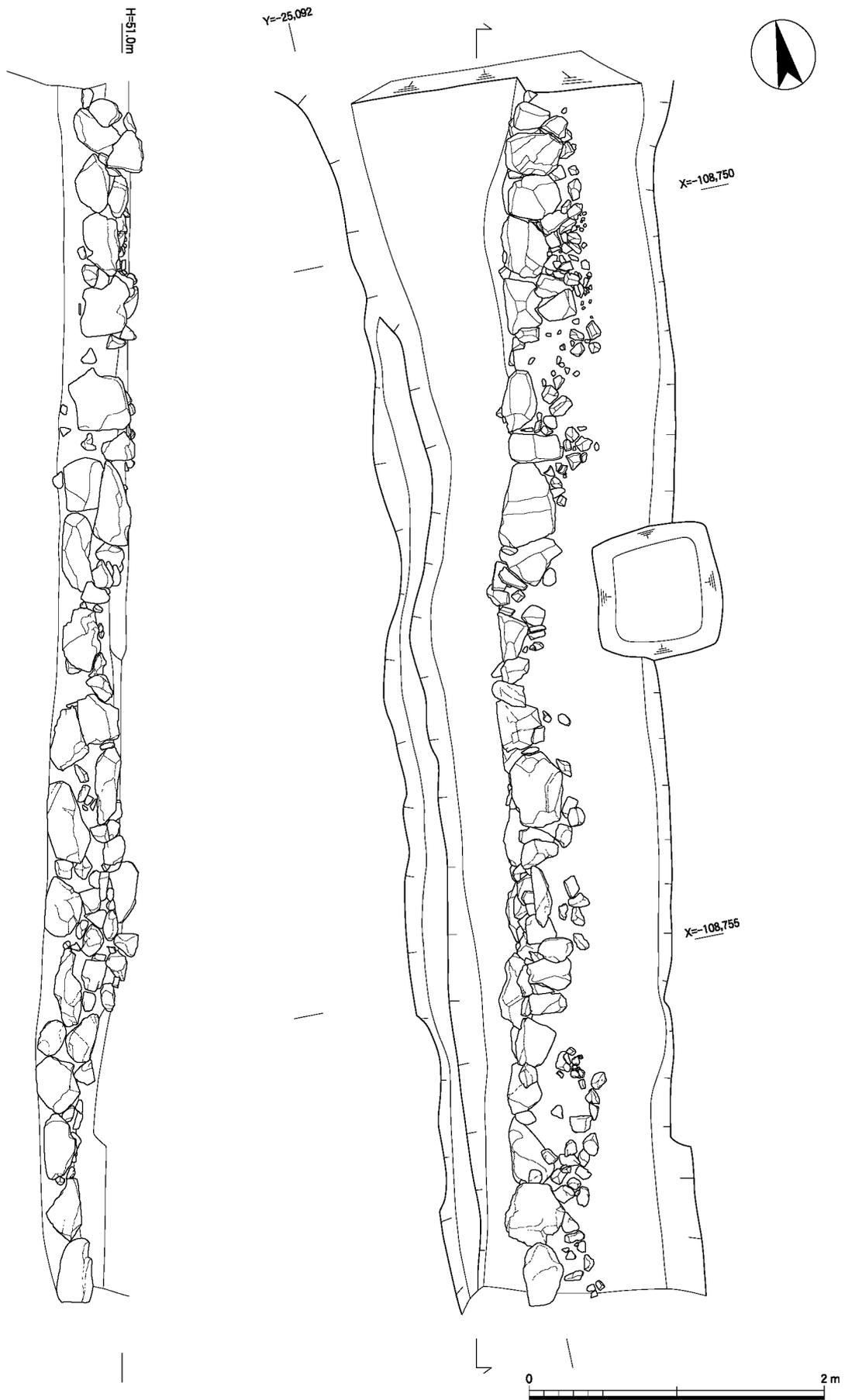


图11 C区溝60石垣実測図(1:40)

溝60(図版2、図11・12) 西部から中央部で検出した複雑な形状の溝で、南側の部分を溝60a、北西側の部分を溝60b、北東側の部分を溝60cとする。

溝60aは南側の調査区外へ延びる。幅約2.0m、深さ約1.0mで、断面形はV字形である。底部は南側が北側よりも約0.1m低い。溝が中程まで埋没した段階で西面する石垣を作る。石垣は北から約10°東へ振る方位をとる。検出した長さは約8.3mで、北側は溝60b・溝60cとつながる部分で途切れ、南側は調査区外へ延びる。残存高は約0.5~0.6mで、大きさ約20~50cmの石を3段以上積み上げる。上面が乱れていることから、さらに上に石が積み上げられていたと考えられる。石材はチャート・砂岩が大部分を占め、ほかに凝灰岩の基壇石材の破片を1点転用していた。裏込めは幅約0.7~0.8m、深さ0.4m以上で、大きさ数cm~約10cmの河原石や瓦類を含んだ砂泥を積む。期古段階~中段階の遺物が出土した。

溝60bは溝60aから西へ屈曲し、さらに2箇所小さく屈曲して西側の調査区外へ延びる。幅約1.0~1.7m、深さ約0.8mで、断面形は鋭いV字形である。底部はほとんど高低差がないが、東側が西側よりもわずかに低い。期古段階~中段階の遺物が出土した。溝60aと溝60bの埋土から出土した瓦片が接合しており、これらが同時に埋没したと推定できる。

溝60cは溝60bから東へ屈曲し、さらに北向きに屈曲して北側の調査区外へ延びる。幅約1.5~1.7m、深さ約0.8mで、断面形は逆台形である。底部は西側が北側よりも約0.1m低い。溝60a・溝60bに比べて、埋土は非常に堅く締まっており、また、遺物も少なかった。期~期の遺物がわずかに出土した。

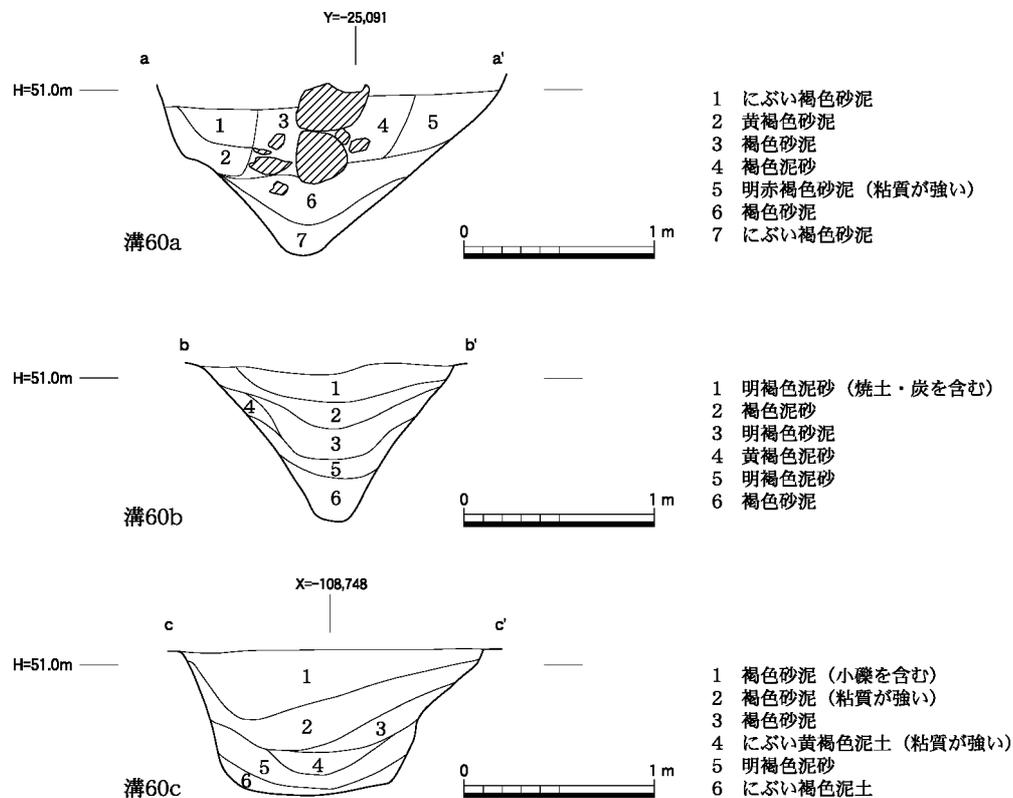


図12 C区溝60断面図(1:40)

溝110 西部で検出した南北方向の溝である。溝60b・溝141の上面で検出した。溝60a石垣と併行する方位をとる。南側は攪乱を受け、北側は浅くなり、調査区北端付近で途切れる。検出した長さは約9.0mで、幅約0.4～0.5m、深さ約0.03～0.1mある。底部は南側が北側よりもわずかに低い。埋土は褐色砂泥で、 期新段階～ 期の遺物が出土した。

溝115 西部で溝110と接して検出した南北方向の溝である。南側は調査区外へ延び、北側は溝110に攪乱される。検出した長さは約5.0mで、幅約0.5m、深さ約0.1～0.2mである。底部は北側が南側よりもわずかに低い。埋土は黄褐色砂泥で、 期の遺物が出土した。

溝141 西部で検出した不整形な東西方向の溝である。東側は溝60aとつながっており、石垣が作られた段階では埋没している。西側は調査区外へ延びる。幅約0.8～1.6m、深さ0.4～0.6mで、断面形はU字形である。底部は凹凸があるが、西側が東側よりも約0.1m低い。埋土は黄褐色砂泥・褐色砂泥で、 期の遺物が出土した。

溝15 東部で検出した東西方向の溝である。西側は浅くなり途切れ、東側は調査区外へ延びる。幅約0.5～0.7m、深さ0.05～0.4mで、底部は段を作りながら、東側へ落ち込む。埋土は褐色砂泥で、 期の遺物が出土した。

(5) D 区の遺構 (図版 3、 図13)

溝170を除き、検出した遺構はいずれも陶磁器や瓦類を廃棄した土壌である。すべて江戸時代中期以降の遺物が出土した。

溝170 (図14) 東部で検出した。調査区を設定した段階では西肩を認めただけであったので、規模を確認するために調査区を東側へ約 1 m 拡張した。しかしながら、遺構の規模が大きかったため作業の安全を考え完掘はしていない。検出した長さは約4.6mで、北側・南側へさらに延びる。確認できた規模は幅2.6m以上・深さ2.2m以上である。埋土は褐色砂泥・暗褐色砂泥・黄褐色砂泥などで流水・滞水の痕跡はない。全体に締まりが悪く、細かい単位で西側から堆積した状況を示

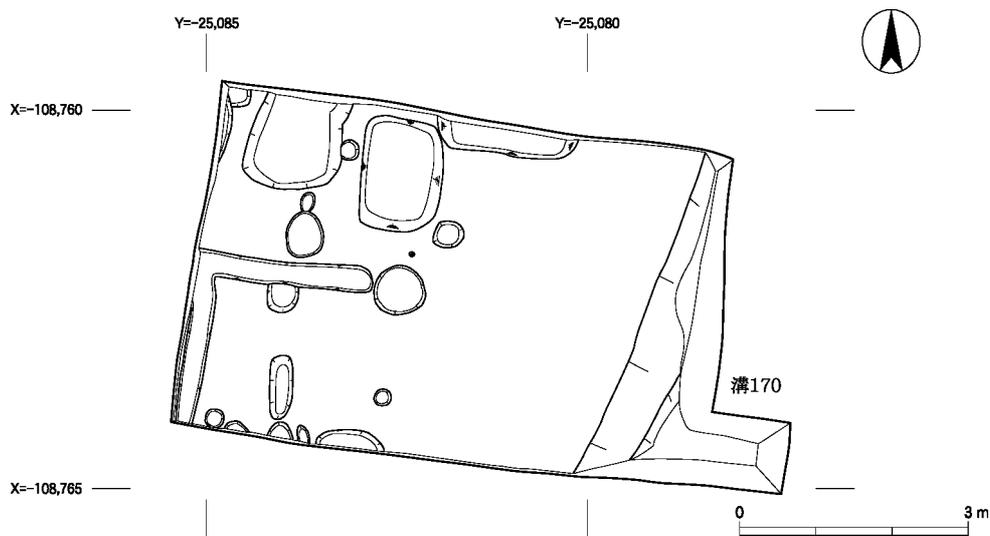


図13 D区平面図 (1 : 100)

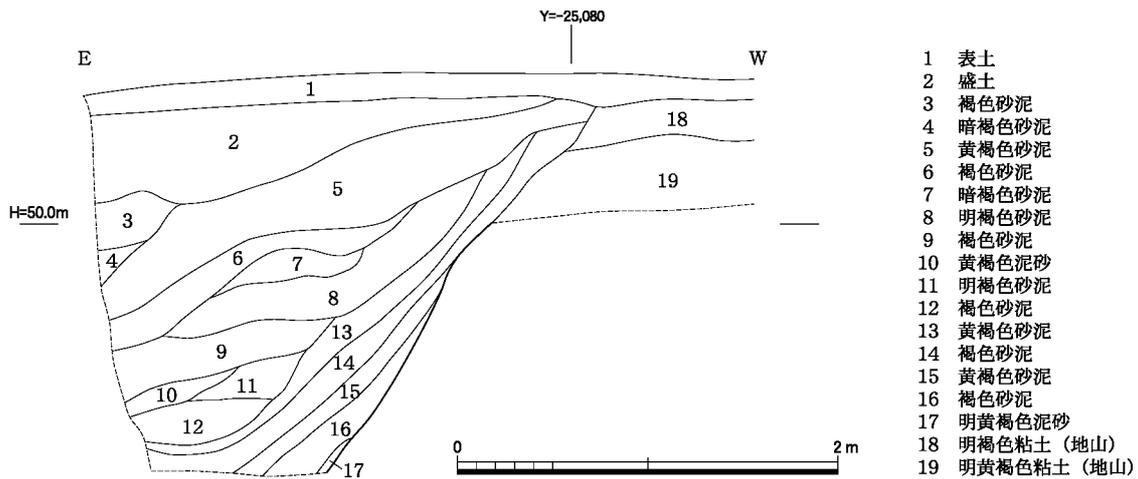


図14 D区溝170南壁断面図(1:40)

す。期の遺物が出土した。

(6) 霊屋移築工事に伴う立会調査

掘削深は、現地表下55～65cmである。表土が約10cm、その下に盛土が厚く積まれ、整地土層や地山を観察することができなかった。今回の基礎工事では、盛土の下層に想定される遺構に影響を与えないことを確認して、調査を終了した。



図15 霊屋移築地点基礎掘削状況(西から)

4. 遺物

(1) 遺物の概要(表2)

調査では各調査区で遺物を採集したが、新しい時代の遺構に、より古い時代の遺物が混入することも多く見られた。出土遺物は瓦類が大部分を占める。江戸時代中期から後期の遺物が約6割、江戸時代前期の遺物が約4割で、遺構が伴わない室町時代以前の遺物は極少量である。

(2) 土器類(図16)

概要 土器には土師器・瓦器・須恵器・焼締陶器・灰釉陶器・緑釉陶器・施釉陶器・磁器などがある。室町時代以前の土器はすべて江戸時代前期以降の遺構から出土した。いずれも小片である。江戸時代前期の土器は溝60からまとまった量が出土した。江戸時代中期から後期の土器は土壇・溝などから出土した。

室町時代以前(図16 1～3) 古墳時代の土器には須恵器の壺(1)・甕がある。1は内外面をヨコナデで調整した後、外面にカキメを施す。脚径から台付壺の脚部と考えた。古墳時代後期に属する。D区溝170から出土した混入品である。

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
古墳時代	須恵器	—	須恵器 1点	0箱	0箱
平安時代	須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・輸入陶磁器	—	須恵器 1点	0箱	0箱
	軒平瓦・丸瓦・平瓦	—	軒平瓦 1点	0箱	0箱
鎌倉時代 ～室町時代	土師器・瓦器・須恵器・焼締陶器・施釉陶器	—	施釉陶器 1点	0箱	0箱
	軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・菊丸瓦	—	軒丸瓦 1点・軒平瓦 1点・菊丸瓦 1点	0箱	0箱
	地覆石・五輪塔	1箱	地覆石 1点	0箱	0箱
江戸時代前期	土師器・瓦器・焼締陶器・施釉陶器・磁器・輸入陶磁器	10箱	土師器17点・焼締陶器 2点・施釉陶器 7点・磁器 2点	8箱	0箱
	軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・菊丸瓦・道具瓦	12箱	軒丸瓦 2点・軒平瓦 3点・菊丸瓦 1点・道具瓦 1点・平瓦 2点	10箱	0箱
	土製品・木製品・石製品・金属製品	—	焼塩壺 1点	—	0箱
江戸時代中期 ～後期	土師器・焼締陶器・施釉陶器・磁器	3箱	土師器 3点・焼締陶器 1点・磁器 4点	2箱	0箱
	棧瓦・丸瓦・平瓦・埴	23箱	埴 4点	—	21箱
	土製品・石製品・金属製品	—	—	—	0箱
計		49箱	58点 (8箱)	20箱	21箱

平安時代の土器には平安時代中期の須恵器の鉢・壺・甕、灰釉陶器の椀、緑釉陶器の椀や平安時代後期の須恵器の鉢(2)、中国製白磁の椀がある。2は内外面をヨコナデで調整する。端部の形状から片口が付くと考えられる。内面下部は使用により平滑になる。C区土壌96から出土した混入品である。鎌倉時代の土器は認めていない。

室町時代の土器には室町時代後期の土師器の皿、瓦器の鍋釜類、須恵器の甕、焼締陶器の甕、施釉陶器の香炉(3)がある。3は口縁部内外面と体部外面に灰オリーブ色の釉薬を厚く施す。脚は粘土粒を貼り付けた後、オサエで成形する。瀬戸産でC区土壌96から出土した。口縁端部の大部分が細かく剥離していることから、伝世品であった可能性がある。

江戸時代前期(図16 4~32) 土師器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、磁器がある。土師器の皿・ほうらく、焼締陶器の擂鉢、施釉陶器の皿・椀・鉢・壺、磁器の皿・椀・鉢などが多い。C区溝60出土遺物を図示した。

土師器の皿(4~19)は中型皿(4~15)と大型皿(16~19)に分けることができる。中型皿は口縁部が底部から緩やかに湾曲するもの(4~11)と屈曲して立ち上がるもの(12~15)がある。大型皿は口縁部が底部から屈曲して立ち上がり、内面には圏線が廻る。ほうらく(20)は底

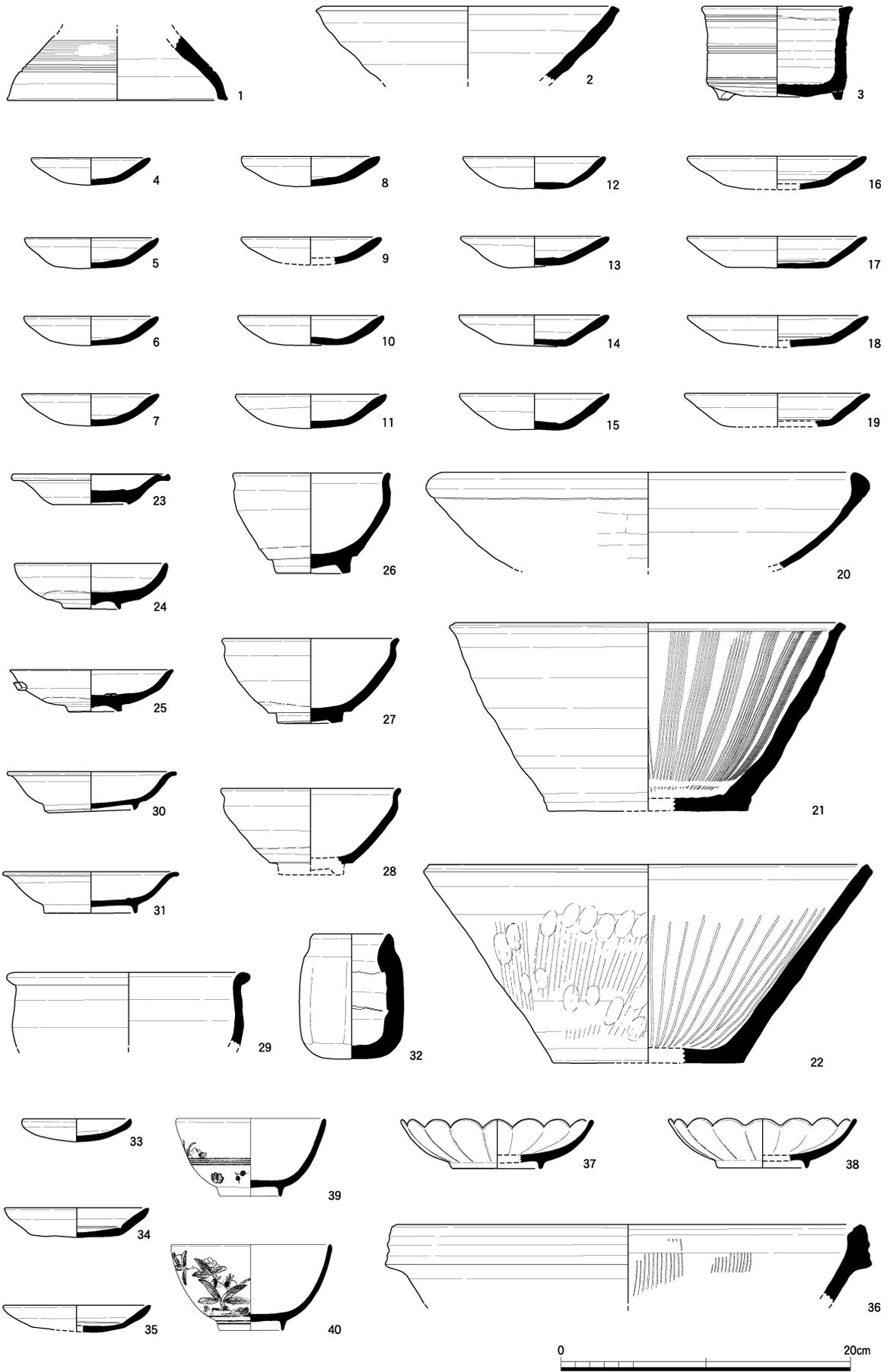


图16 土器類実測図(1:4)

部外面に煤が付着する。焼締陶器の播鉢（21・22）は大型で、内面下部は使用により平滑になる。21は信楽産、22は丹波産で他の生産地の製品は少ない。施釉陶器の皿（23～25）は小型品が多く、23は瀬戸・美濃産、24・25は唐津産である。いずれもオリーブ色の灰釉を施す。25は底部内面の3箇所と高台の1箇所に胎土目の目痕がのこり、口縁部外面に重ね焼きをした別個体が溶着する。椀（26～28）は瀬戸・美濃産が大部分である。暗褐色から黒褐色の鉄釉を厚く施す。鉢（29）は小破片が多い。29は唐津産で灰色の灰釉を施す。磁器はすべて中国製で、青花椀・白磁皿（30・31）などがある。31は底部内面に細かい目痕がのこる。その他に土製品の焼塩壺（32）が出土した。 期古段階～中段階に属する。

江戸時代中期から後期（図16 33～40）土師器、焼締陶器、施釉陶器、磁器がある。施釉陶器の椀・壺、磁器の皿・椀が多い。

土師器の皿（33～35）は中型皿（33）と大型皿（34・35）に分けることができる。江戸時代前期に比べ小型になる。焼締陶器の播鉢（36）は小破片で、産地は不明である。施釉陶器も小破片が多く、図示することができなかった。磁器はすべて伊万里産である。白磁皿（37・38）は型で成形した後、口縁端部を花卉形に切り落とす。染付椀（39・40）は外面に梅や柘榴の文様を描く。33～36はC区土壌43、37～40はC区土壌96から出土した。いずれも Ⅱ期に属する。

（3）瓦 類（図版4、図17・18）

概要 瓦には軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・道具瓦がある。また、江戸時代前期以降の遺構からは Ⅱが多く出土している。室町時代以前の瓦は少量で、すべて江戸時代前期以降の遺構から出土した。江戸時代前期の瓦は溝60などから出土した。江戸時代中期から後期の瓦や Ⅱは土壌96などから出土した。以下、種類毎に主要な瓦を報告する。¹²⁾

軒丸瓦（図版4、図17 41～43）文字文（41）と巴文（42・43）がある。41は中央に縦書きで「正法」の文字を配し圏線が廻る。瓦当部側面上半は縦ナデ、下半は横ナデ、裏面はナデである。接合は不明である。江戸時代に属する。1点出土。「正法」は妙心寺の山号である「正法山」に由来する。42は右回り3巴文で、頭部は離れ尾は長く互いに接する。外区珠文は密である。瓦当部側面上半は縦ナデ、下半は横ナデ、裏面はナデで、丸瓦凸面は縦ナデ、凹面布目は側面縦ナデである。接合は不明である。鎌倉時代から室町時代に属する。1点出土。43は右回り3巴文で、頭部は離れ尾は長く互いに接しない。外区珠文は密である。瓦当部側面は上半縦ナデの後、粗いヘラミガキ、下半は横ナデ、裏面は不定方向ナデ、周縁部はヘラミガキである。瓦当部裏面上端に丸瓦を当て、粘土を付加して接合し、接合面にヘラキザミを施す。焼成時に燻す。江戸時代に属する。1点出土。

軒平瓦（図版4、図17 46～50）剣頭文（46）と唐草文（47～50）がある。46は中心飾りは菊花文で両側に陰刻剣頭文を3個垂直に配する。段頸。瓦当部成形は折曲技法で、瓦当部に布目が残る。瓦当部凹面端部は横ケズリ、凹面は布目、顎部凸面は横ナデで裏面には曲げ皺がある。山城産で平安時代後期に属する。1点出土。47は内向唐草文である。中心飾りは半裁菊花文で、

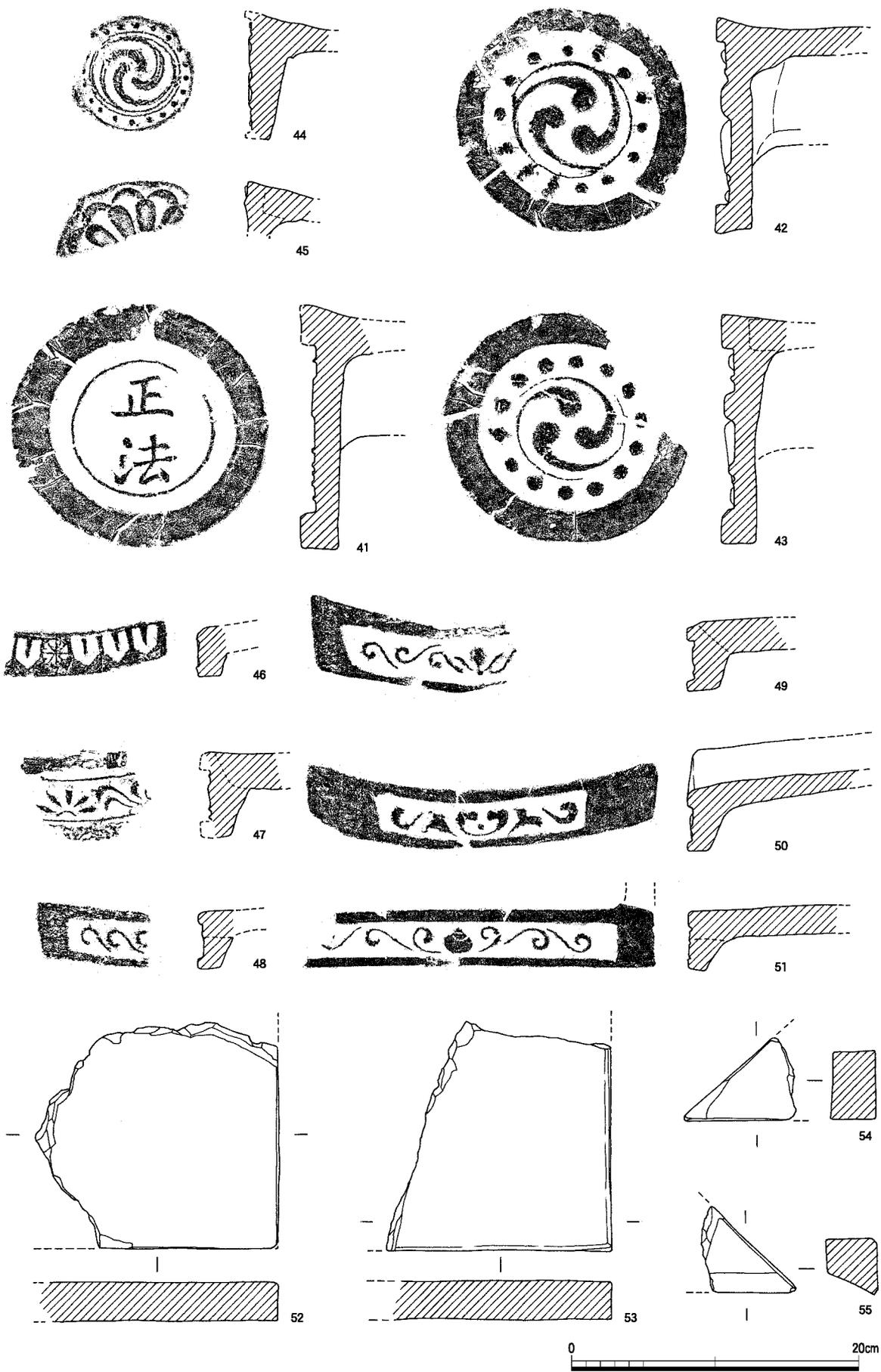


图17 瓦類拓影・実測図(1:4)

唐草文は内側に3転する。段顎。瓦当部成形は瓦当貼り付けである。瓦当部凹面端部は横ケズリ、凹面・凸面・裏面は横ナデで、平瓦凹面はナデの後、粗いヘラミガキ、凸面は横ナデである。鎌倉時代から室町時代に属する。1点出土。東福寺出土瓦〔『報告書』 72〕と同文である。48は外向唐草文である。唐草文は両側に展開する。段顎。瓦当部成形は顎貼り付けである。瓦当部の調整は不明である。江戸時代に属する。1点出土。49は外向唐草文である。中心飾りは花文で中心は紡錘形である。唐草文は両側に3転する。段顎。瓦当部成形は瓦当貼り付けである。瓦当部凹面端部は横ケズリ、凸面・裏面は横ナデで、平瓦凹面はヘラミガキ、凸面は横ナデ、側面は縦ナデである。焼成時に燻す。江戸時代に属する。1点出土。法隆寺出土瓦〔『資材帳』 276J〕に類似する。50は外向唐草文である。中心飾りは上対向C字形で、中心に円形を配する。唐草文は両側に2転する。周縁左右両側が広い。段顎。瓦当部成形は不明である。瓦当部凹面端部は横ケズリ、凸面・裏面は横ナデで、平瓦凹面は横ナデ、凸面はナデ、側面は縦ナデである。焼成時に燻す。江戸時代に属する。1点出土。

道具瓦（図版4、図17 44・45・51）棟に用いた菊丸瓦には巴文（44）と菊花文（45）がある。44は右回り3巴文で、頭部は離れ尾は長く互いに接して圏線となる。外区珠文は密である。范型を二重に押す。瓦当部側面上半縦ナデ・下半横ケズリ・裏面ヘラでケズリである。差込の丸瓦部凸面は縦ナデである。接合は不明である。鎌倉時代から室町時代に属する。1点出土。45は蓮弁を上・下二重で交互に配する。各弁央は凹む。瓦当部側面上半縦ナデ・裏面ナデである。瓦当部裏面上端に溝を付け、丸瓦を当て、粘土を付加して接合する。接合面にヘラキザミを施す。焼成時に燻す。江戸時代に属する。1点出土。下鴨神社出土甕瓦〔『木村』 645〕に類似する。

51は両側縁に縦棧瓦が取り付く掛け瓦の一種である。瓦当面は中央部が盛り上がり弧状を呈する。内区文様は外向唐草文である。中心飾りは宝珠で、唐草紋は両側に3転する。段顎。瓦当部成形は顎貼り付けで、縦棧も平瓦部両側縁に貼り付けて接合する。接合面にはヘラキザミを施す。瓦当部凹面端部は横ケズリ、凸面・裏面は横ナデで、平瓦凹面両側部は縦ナデ、中央はヘラミガキ、凸面は横ナデ、側面は縦ナデである。内区には離れ砂が付着する。焼成時に燻す。江戸時代に属する。1点出土。内区紋様では久安寺出土瓦〔『山崎』 49図3〕に類似する。螻羽瓦として使用

した可能性が考えられる。また、調査地東側の花園高等学校内の調査でも同型式の瓦が塀瓦として報告されている。¹³⁾ 道具瓦ではほかに面戸瓦が出土している。

平瓦（図18 56・57）平瓦端部凹面に文字と印を押捺する個体がある。完形品ではないので軒平瓦・平瓦の区別は不明である。56は「福田」と印、57は「加賀」と印である。ともに平瓦部凹面・凸面はナデの後、ヘラミガキ、端部は横ケズリである。妙心寺勅使門獅子口には宝永3年（1706）の年号とに「福田加賀守」、玉鳳院唐門獅子口には宝永6年（1709）の年号とに「福田加賀守弟子長尾小兵衛作人」

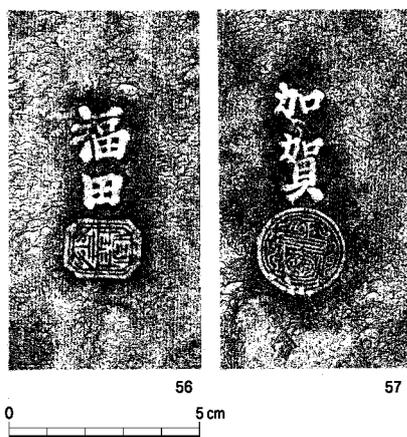


図18 瓦刻印拓影（1：2）

のヘラ書きがあることが報告されており¹⁴⁾関連が注目できる。

■ (図17 52~55) 方形(52・53)と三角形(54・55)がある。三角形の角は約45°なので四半敷きの敷■であったと考えられる。厚さはほぼ均一である。全面をナデにより調整するが、上面はわずかに凸面になり、他の部分よりも調整が丁寧である。また、55のように裏面に向けて側面に角度をつける個体がある。

このほかに長方形の大型の■がある。長辺約43cm、短辺約30cmで、長辺の一辺に幅約5cmの粘土帯を貼り付け段を作り、もう一辺には沈線をつける。また、短辺の一辺には幅約5cmの粘土帯を貼り付け、2箇所に穿孔する。用途は不明である。

(4) その他の出土遺物 (図版4、図16・19)

概要 その他の出土遺物には土製品・木製品・石製品・金属製品・骨角製品・動植物遺体などがある。

土製品 (図16 32) 江戸時代前期では焼塩壺(32)とつぼつぼがある。江戸時代中期から後期では焼塩壺と建物形土製品がある。建物形土製品は楼閣風の建物を表現し、緑釉を施す。

木製品 江戸時代前期の漆器椀が少量出土した。遺存状況は悪く、木質が腐朽しており漆膜のみを認めた。内外面とも朱漆である。

石製品 (図版4、図19 58) 基壇地覆石の破片がある(58)。溝60aの石垣に転用されていた。凝灰岩製。前面は丁寧に平坦に整える。上面は露出する部分は平坦に整えるが、調整は前面よりも粗い。背面側には羽目石を組み合わせる段と束石を組み合わせる刃穴を加工する。調整は粗雑で、刃先幅約3cmの工具を連続して使用した痕跡がのこる。下面は延石を組み合わせる段を加工するが、調整は粗雑である。背面は破損が著しいが、残存部が石材の奥行き幅である可能性がある。また、前面は黒灰色、上面・下面は橙色に変色しており、火災を受けたことが分かる。ただし、変色が基壇として組み合わせられた状態では露出しない部分にまで及んでいることから、火災を受けたときには既に転用されていたと推定できる。したがって、この石材は2回以上転用されていることになり、室町時代をさらにさかのぼる可能性も考えられる。江戸時代前期では、砥石・五輪塔がある。五輪塔は天輪・風輪部分の破片で、より古い時代のものが混入した可能性がある。江戸時代中期

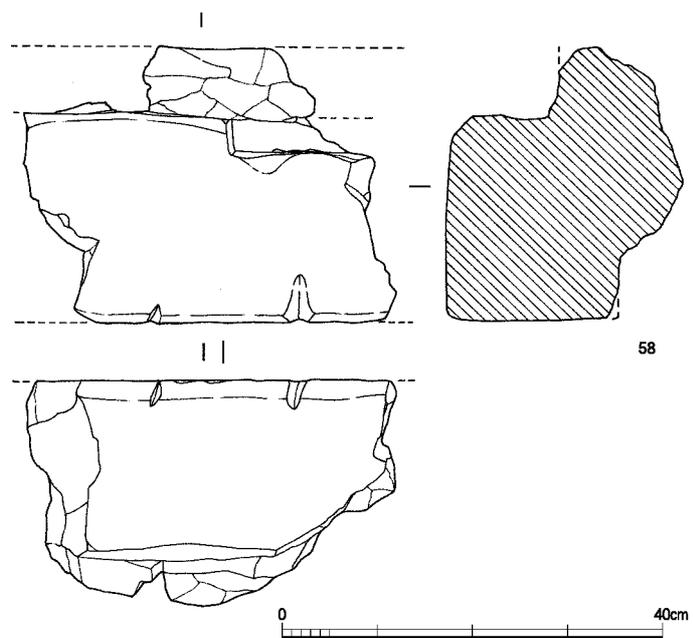


図19 石製品実測図(1:8)

から後期では、硯・砥石・加工した凝灰岩がある。硯は小型品の破片である。凝灰岩は色調は青灰色で、粗く方形に加工する。用途は不明である。

金属製品 江戸時代前期では、銅銭・キセル雁首・用途不明銅製品・鉄釘・用途不明鉄製品がある。銅銭は溝60aの底部から34枚以上が重なって出土した。判読できた銭銘には「皇宋通寶」・「元豊通寶」・「元祐通寶」・「政和通寶」・「洪武通寶」がある。江戸時代中期から後期では、キセル雁首・銅釘・用途不明銅製品・鉄釘・用途不明鉄製品・鉄滓がある。用途不明銅製品は棒状の形態をとる。用途不明鉄製品は錆びて遺存状態が非常に悪い。

その他 江戸時代前期から後期の遺構から焼土と炭が出土した。

5.まとめ

調査地で検出した最も古い遺構は江戸時代前期に属する。その中で溝60aの石垣の上面が乱れていることから、石垣が構築された後に上部が削平されたことが分かる。このときに今回の調査で遺構を検出した地山面が形成され、それ以前の遺構は削平された可能性が高い。江戸時代前期の遺構が規模の大きい遺構に限られていることもこれを裏付ける。

江戸時代前期のC区溝60a・溝60b・溝60cは規模が大きく、複雑な形状で結合しており、区画の施設と考えられる。この段階ではC区溝60aとC区溝141も結合していた。また、C区溝15も同時期の可能性があり、これらの溝には調査地から雨水などを排出する機能もあったと推定できる。C区溝60cは溝60a・溝60bに比べ埋土が堅く締まり、出土遺物の構成も異なっていることから、先に埋没したことが考えられる。また、C区溝60aは中程まで埋没した段階で西面する石垣が構築された。西側には併行して溝115、次いで溝110が作られており、両者の間が通路として機能していた可能性がある。通路とすると幅は約2.5～2.8mになる。江戸時代前期の間に再整備が行われたことが分かる。

江戸時代中期から後期には、C区北東部の建物やB区土壇198の石垣が作られた。また、C区土壇96などから多量の瓦・■が出土したことから建物の建て替えが行われたことが分かる。断片的ではあるが、これらのことから江戸時代以降、調査地では何度かの整地や建物の建て替えなどの整備が行われたことが推定できる。

今回の発掘調査では、平安京に関連する遺構の検出と妙心寺の創建から江戸時代にいたる調査地の変遷を明らかにすることを主な目的としたが、室町時代以前の遺構を検出することはできなかった。しかしながら、江戸時代前期に構築された溝60や石垣をはじめとする遺構の状況から、江戸時代以降の妙心寺南東部の歴史の変遷を明らかにできたことは大きな成果である。おそらく、応仁の乱で焼亡した後、室町時代後期から江戸時代前期にかけて妙心寺が復興される過程で整備が繰り返されたのであろう。

D区溝170は検出した西肩の方向が現在の宇多川の流路と併行することや検出位置、規模、埋土の状況から考えて、宇多川の旧流路を人為的に埋め立てた遺構と考えられる。江戸時代前期に埋

め立てられていることは調査地で行われた整備と対応する。また、このことは宇多川の旧流路を推定する手掛かりとなった。宇多川の旧流路は、調査地東側の花園高等学校内の調査でも検出しており、調査成果を総合すると、現在は護岸工事により直線的な流路となっている宇多川が、かつては幅広い流路の川であったことが明らかとなった。

また、遺構を検出することはできなかったが、少量ながらも古墳時代から室町時代にかけての遺物を採集したことから、調査地周辺には室町時代以前の遺構もかつては存在していたと推定できる。今後の調査の進展により、それらが発見されることが期待される。

註

- 1) 平方幸雄・辻 純一「史跡妙心寺境内」『平安京跡発掘調査概要 文化庁国庫補助事業による発掘調査の概要』1979年度 京都市文化観光局 1980年
- 2) 平方幸雄「史跡妙心寺境内・平安京右京北辺四坊1」平田 泰「史跡妙心寺境内・平安京右京北辺四坊2」『京都嵯峨野の遺跡 - 広域立会調査による遺跡調査報告 - 』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1997年
- 3) 加納敬二「第 章 遺構 花園地区」『京都嵯峨野の遺跡 - 広域立会調査による遺跡調査報告 - 』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1997年
- 4) 3) に同じ。
- 5) 3) に同じ。
- 6) 3) に同じ。
- 7) 『妙心寺境内地の調査』花園大学考古学研究室 1985年
- 8) 『花園大学構内調査報告』 花園大学考古学研究室 1989年
- 9) 2001年、2002年に実施された。
- 10) 3) に同じ。
- 11) 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- 12) 瓦の観察には以下の文献を参考にした。
長谷川行孝「瓦」『東福寺防災施設工事・発掘調査報告書』東福寺 1990年
法隆寺昭和資材帳編集委員会『法隆寺の至寶 瓦』小学館 1992年
『木村捷三郎収集瓦図録』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年
山崎信二『中世瓦の研究』奈良国立文化財研究所学報第59冊 奈良国立文化財研究所 2000年
- 13) 8) に同じ。
- 14) 中尾正治・高橋美久二「京都紀年銘古瓦銘文集」『京都考古』23 1976年

圖 版

報 告 書 抄 録

ふりがな	しせきみょうしんじけいだい・へいあんきょううきょういちじょうしぼうはっちょうあと							
書名	史跡妙心寺境内・平安京右京一条四坊八町跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報							
シリーズ番号	2002-16							
編集者名	山本雅和							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2003年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しせきみょうしんじけいだい 史跡妙心寺境内 ・へいあんきょうあと ・平安京跡	きょうとうしうきょうく 京都市右京区 はなぞのみょうしんじちよう 花園妙心寺町	26100	A706	35度 01分 10秒	135度 43分 30秒	2002年11月 18日～2003 年1月31日 立会調査 2003年3月 26日～2003 年3月28日	330m ²	妙心寺 涅槃堂 再建工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
平安京跡	都城跡	平安時代			須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・輸入陶磁器・瓦		平安時代中期から後期の遺物が出土した。	
史跡妙心寺境内	寺院	鎌倉時代・室町時代			土師器・瓦器・須恵器・焼締陶器・施釉陶器・瓦・石製品		室町時代後期の遺物が出土した。	
		江戸時代前期	溝・石垣・柱穴・流路		土師器・瓦器・須恵器・焼締陶器・施釉陶器・磁器・輸入陶磁器・瓦・土製品・石製品・金属製品・木製品		大規模な溝を検出した。宇多川の流路を検出した。	
		江戸時代中期～後期	溝・石垣・建物・柱穴・土壇		土師器・瓦器・焼締陶器・施釉陶器・磁器・瓦・土製品・石製品・金属製品		建物の一部を検出した。	

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2002-16

史跡妙心寺境内・
平安京右京一条四坊八町跡

発行日 2003年3月31日

編集
発行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 075-256-0961